

筑後東部地区遺跡群Ⅶ

福岡県筑後市大字鶴田所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

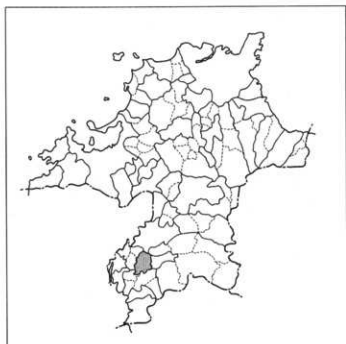
第38集

2002

筑後市教育委員会

ちくごとうぶちくいせきぐん
筑後東部地区遺跡群Ⅶ

つるたうしがいけ
鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査



2002

筑後市教育委員会

序

本書に掲載した発掘調査は、平成10年度に行われた県営圃場整備事業筑後東部地区における緊急発掘調査であります。

筑後東部地区は、市内でも遺跡が密集する地域であり、旧石器から近代までの様々な人達の足跡を垣間見ることができつつあります。

現在、開発に伴う緊急発掘調査の増大で遺跡の破壊、消滅を余儀なくされ、記録保存によって保護する事しかできないのが現状です。その一助として、発掘調査で保存された情報を整理し、本書の作成を行いました。

なお、発掘調査を行うにあたり、福岡県筑後川水系農地開発事務所、筑後東部改良区及び、地元の方々には、多大なる御配慮と御協力を賜りました事に感謝の意を表します。

おわりに、この報告書の発行にあたり、御指導と御協力をいただきました関係者各位と発掘調査に参加されました皆様に対して、厚く御礼申しあげる次第です。

平成14年3月

筑後市教育委員会
教育長 牟田口和良

例言

1. 本書は筑後川水系農地開発事務所が平成10年度に実施した県営圃場整備事業筑後東部地区の事前調査として筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本書に掲載した調査期間や調査に係わる経緯については「I.調査経過」と組織に記した通りである。
3. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会で行った。調査関係者は第I章に記した通りである。なお、出土遺物・図面・写真は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。
4. 本書に使用した図面の内、遺構実測図は柴田剛、石器の実測図は、平塚あけみ、仲文恵、土器の実測図は柴田が作成し、石器の製図は仲、遺構・遺物の製図は柴田が行った。
5. 本書に使用した遺構写真、遺物写真は柴田が撮影、空中写真は(有)空中写真企画に委託した。
6. 今回の調査に用いた測量座標は、国土座標系第II座標系を基準としており、方位は全て座標北(G.N.)である。
7. 本書で示した遺構の表示は以下の略号による。
SX - 集石遺構・たまり状遺構・包含層 SP - ビット状遺構 SD - 現代溝・トレンチ
8. 本書の執筆、編集は柴田が行った。

目次

I.調査経過と組織	1
II.位置と環境	2
III.調査成果	
1.鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査	
(1) はじめに	4
(2) 検出遺構	4
(3) 出土遺物	10
(4) 小結	23

I. 調査経過と組織

平成10年度に福岡県筑後川水系農地開発事務所から筑後市へ圃場整備工事予定地内の埋蔵文化財について確認依頼があり、これを受けた筑後市教育委員会では同年に試掘調査を実施し、圃場整備工事予定地内に埋蔵文化財が認められたことを事業関係者に回答し、協議を行った。協議の結果、「筑後東部地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査」として、掘削の及ぶ排水路工事予定地、面の削平を受ける箇所を発掘調査することとなった。埋蔵文化財発掘調査の費用については県水系事務所で負担することで合意した。

調査は、平成10年度に実施し、遺物の整理及び報告書作成については、平成13年度に筑後市文化財整理室で行った。

調査組織

(平成10年度)

1) 発掘調査及び整理作業

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川雅晴
庶務	社会教育課長	山口逸郎
	社会教育係長	田中清通
	社会教育係	永見秀徳
		小林勇作
		田中剛
		上村英士
		柴田剛
		立石真二

(平成13年度)

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川雅晴
庶務	社会教育課長	松永盛四郎
	文化係長	成清平和
	文化係	永見秀徳
		小林勇作
		上村英士
		柴田剛
		立石真二

2) 発掘調査作業員

地元有志

3) 整理作業参加者(順不同、敬称略)

(整理補助員) 平塚あけみ 仲文恵

(整理作業員) 野間口靖子 湯川琴美 野口晴香 横井理絵 馬場敦子 福田澄子
佐々木寿代 妹川玲子 荒巻悦子

なお、調査及び報告書作成に際しては、以下の方々にご指導、ご教示を賜ったので、記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

福岡県教育庁	小田和利	杉原敏之
八女市教育委員会	大塚恵治	
久留米教育委員会	富永直樹	白木守

II.位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田圃地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中央部に形成されている。

以下に筑後東部地区園場整備事業に係わる発掘調査の遺跡一覧を挙げる (Tab.1)。

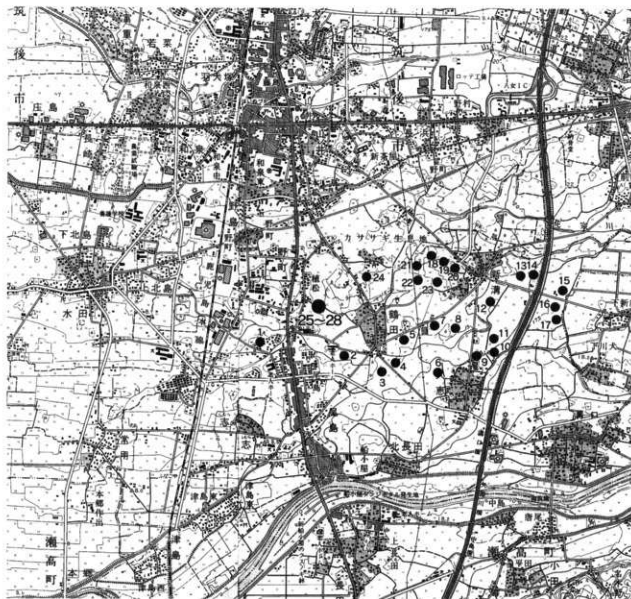


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/30,000)

- | | | | | |
|---------------------|--------------------------|--------------|---------------|--------------|
| 1. 裏山遺跡 | 2. 鶴田岸添遺跡 | 3. 鶴田前高遺跡 | 4. 鶴田植原遺跡2次 | 5. 鶴田武津忠遺跡 |
| 6. 久恵野元遺跡1.2次 | 7. 新清松原遺跡 | 8. 新清丸田遺跡 | 9. 久恵岸ノ下遺跡 | 10. 久恵川ノ上遺跡 |
| 11. 久恵権藤遺跡 | 12. 久恵中野遺跡 | 13. 久恵内次郎遺跡 | 14. 久恵北草場遺跡 | 15. 久恵今町遺跡 |
| 16. 久恵北水原遺跡 | 17. 清口北新替遺跡 | 18. 清口清代遺跡 | 19. 鶴田東大坪遺跡2次 | 20. 新清大丸遺跡 |
| 21. 鶴田東大坪遺跡1次 | 22. 鶴田西田遺跡 | 23. 鶴田西畑遺跡 | 24. 鶴田野田遺跡 | 25. 鶴田東牛ヶ池遺跡 |
| 26. 鶴田牛ヶ池遺跡1.3.4.5次 | 27. 鶴田木屋ノ角遺跡 (鶴田牛ヶ池遺跡2次) | 28. 鶴田西牛ヶ池遺跡 | | |

遺跡名	調査年度	時期	遺構の性格	遺跡名	調査年度	時期	遺構の性格
鶴田岸添遺跡第1次	平成5年度	弥生～古墳	集落	鶴田西田遺跡	平成8年度	不明	溝
新溝丸田遺跡	〃	縄文・古墳	集落	鶴田東大坪遺跡第1次	〃	縄文～中世	溝、土庫、墳墓
鶴田橋原遺跡第1次	〃	中世	集落	鶴田西畑遺跡	〃	古墳	集落、土庫
鶴田前高遺跡	〃	奈良・中世	集落	鶴田野田遺跡	〃	不明	溝
鶴田岸添遺跡第2次	平成6年度	弥生～古墳	集落	溝口北新替遺跡	平成9年度	中世	溝
鶴田岸添遺跡第3次	〃	弥生～古墳	集落	久恵北水原遺跡	〃	弥生	溝
久恵野元遺跡第1次	〃	中世	集落	久恵今町遺跡	〃	弥生～中世	溝、竪穴住居
久恵野元遺跡第2次	〃	〃	〃	新溝丸田遺跡	〃	近世	溝
鶴田岸添遺跡第4次	〃	弥生～古墳、近世	集落	鶴田東大坪遺跡第2次	〃	近世	溝
新溝松原遺跡	〃	弥生～古墳	集落	鶴田調代遺跡	〃	近世	溝
久恵藤森遺跡第1次	平成7年度	弥生～中世	集落	鶴田東牛ヶ池第1次	平成10年度	縄文、近世	土庫
久恵北草場遺跡	〃	弥生～古墳	集落	鶴田東牛ヶ池第2次	〃	縄文、近世	土庫、竪穴住居
久恵内次郎遺跡第1次	〃	弥生	集落	鶴田牛ヶ池第1次	〃	縄文	集石遺構
鶴田武津志遺跡	〃	弥生、中世	溝	鶴田牛ヶ池第2次	〃	古代	竪道
鶴田橋原遺跡第2次	〃	中世	集落	鶴田牛ヶ池第3次	〃	縄文、近世	ピットほか
久恵理ノ下遺跡第1次	〃	中世	溝、土庫	鶴田牛ヶ池第4次	〃	縄文、弥生、近世	竪穴ほか
久恵理ノ下遺跡第2次	〃	〃	〃	鶴田西牛ヶ池遺跡	〃	弥生、近世	竪穴住居ほか
久恵藤森遺跡第2次	〃	〃	〃				
久恵上川原遺跡	〃	縄文～中世	集落				
久恵用ノ上遺跡	〃	弥生～中世	集落				
久恵内次郎遺跡第2次	〃	弥生～近世	溝				
久恵中野遺跡	〃	縄文～古墳	集落				
久恵東岸遺跡	〃	縄文～中世	土庫				

Tab.1 圃場整備事業に係わる筑後東部地区発掘調査（平成10年度まで）



Fig.2 鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査周辺調査箇所位置図（1/5,000）

遺跡名一覧

1. 鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査
2. 鶴田西牛ヶ池遺跡
3. 鶴田牛ヶ池遺跡第2次調査
4. 鶴田牛ヶ池遺跡第4次調査
5. 鶴田牛ヶ池遺跡第5次調査
6. 鶴田牛ヶ池遺跡第3次調査
7. 鶴田東牛ヶ池遺跡第1次調査
8. 鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査

Ⅲ.調査成果

1.鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査

(1) はじめに (Fig.3)

鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査は筑後市大字鶴田字牛ヶ池に所在する。県営圃場整備事業筑後東部地区第12工区について試掘調査を行った結果、掘削の及ぶ面と排水路について遺構を検出した為、本調査を行うことになった。調査対象面積は約2,500㎡、調査期間は平成10年11月6日から同年12月18日迄である。発掘調査は柴田剛が担当した。

調査地は、標高約12m程の台地上に立地しており、現況は茶畑と葡萄棚の基礎等で遺構面の多くは破壊を受けていた。また、地権者の方から、調査地点を含めた周辺を重機によって整地したと報告を受けた。調査の結果、調査区内から集石遺構、不明遺構等を検出した。以下、その成果について報告する。

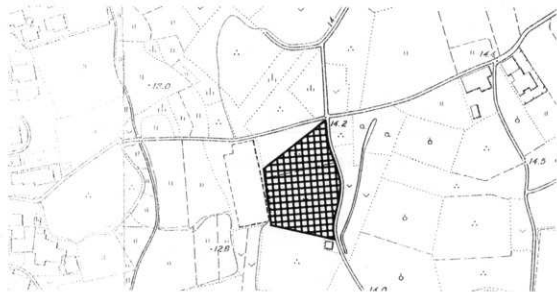


Fig.3 鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 検出遺構

集石遺構

1S X 020 (Fig.4, Pla.2)

調査区の南西部に位置する。石材は、5~30cm程の河原石が約1.5mの範囲で集中する。やや離れた位置に30cmを超える台石が存在する。石は熱を帯びた痕跡があり、赤変している石が多く存在する。集石は、円形状を呈すると思われるが、一部集石が乱れている。また、明確な掘り込み、出土遺物、炭化物の検出は出来なかった。

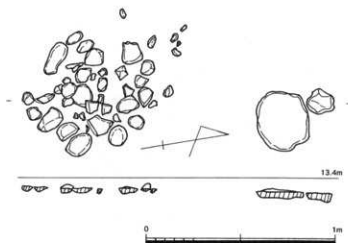


Fig.4 1SX020遺構実測図 (1/20)

1S X 025 (Fig.6, Pla.3)

調査区の南西部に位置する。石材は、2~15cm程の河原石が約0.8mの範囲に集中する。石は熱を帯びた痕跡が顕著に認められ、赤変している石が多く存在する。また、明確な掘り込み、出土遺物、炭化物の検出は出来なかった。

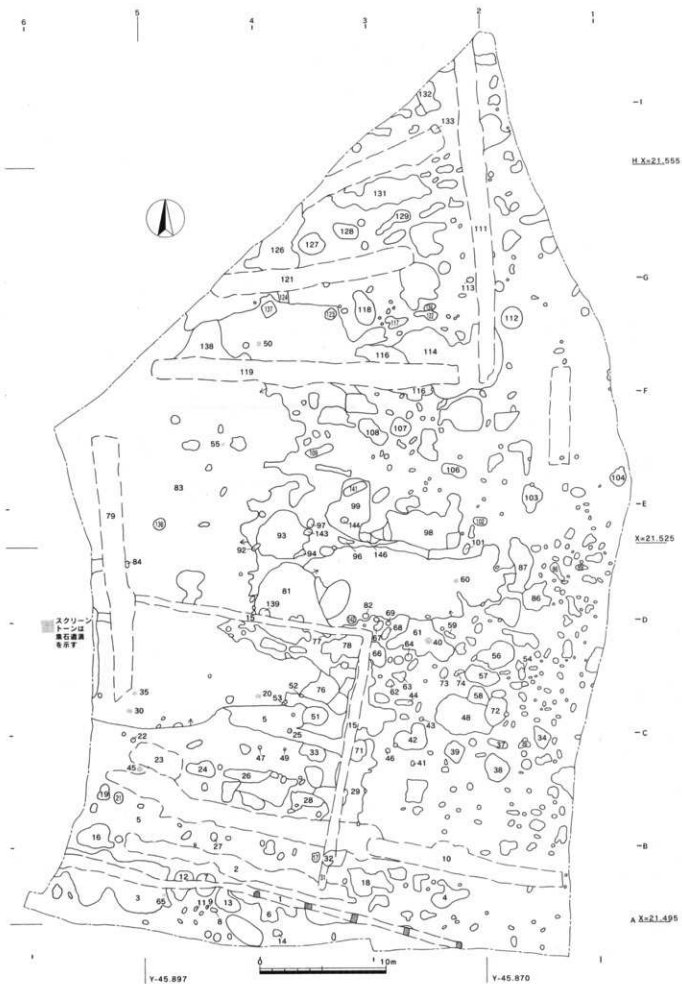


Fig.5 鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査遺構全体図 (1/300)

1S X 030 (Fig.7, Pla.4・5)

調査区の南西部に位置する。石材は、2~12cm程の河原石が約1.5mの範囲に集中する。石は熱を帯びた痕跡が顕著に認められ、赤変している石が多く存在する。集石は一部乱れた部分が認められる。恐らく、楕円形を呈すると考える。また、明確な掘り込み、出土遺物、炭化物の検出は出来なかった。

1S X 035 (Fig.7, Pla.4・5)

調査区の南西部に位置する。石材は、2~15cm程の河原石が約1.5mの範囲に集中する。石は熱を帯びた痕跡が顕著に認められ、赤変している石が多く存在する。集石は一部乱れた部分もあるが、円形状を呈すると考える。

また、明確な掘り込み、出土遺物、炭化物の検出は出来なかった。

1S X 040 (Fig.8, Pla.5)

調査区の中央部よりに位置する。石材は、2~13cm程の河原石が約0.8mの範囲に集中する。石は熱を帯び、赤変している。集石は、かなり破壊を受けていると考えられる。また、明確な掘り込み、出土遺物、炭化物の検出は出来なかった。

1S X 045 (Fig.9, Pla.5・6)

調査区の南西部に位置する。石材は、5~20cm程の河原石が約1.0mの範囲に集中する。石は熱を帯びた痕跡が顕著に認められ、赤変している石が多く存在する。集石は円形状を呈すると思われる。また、明確な掘り込みはなかった。出土遺物は、縄文時代の押型文土器2点、黒曜石(剥片)が出土している。

1S X 050 (Fig.10, Pla.7)

調査区の北西部に位置する。石材は、2~12cm程の河原石が約0.8mの範囲に集中する。石は熱を帯び赤変している痕跡が顕著に認められる。また、明確な掘り込み、出土遺物、炭化物の検出は出来なかった。

1S X 055 (Fig.11, Pla.7)

調査区の北西部に位置する。石材は、5~10cm程の河原石が約0.7mの範囲に集中する。石は熱を帯び赤変している痕跡が顕著に認められる。また、明確な掘り込み、出土遺物、炭化物の検出は出来なかった。

1S X 060 (Fig.12, Pla.8)

調査区の中央部よりに位置する。石材は、5~15cm程の河原石が約1.5mの範囲に集中する。石は熱を帯び赤変している痕跡が顕著に認められる。また、明確な掘り込み、出土遺物、炭化物の検出は出来なかった。

1S X 065 (Fig.13, Pla.8)

調査区南西部に位置する。石材は、5~10cm程の河原石が認められた。石は熱を帯び赤変している痕跡が顕著に認められる。しかし、大部分を削平されているため、詳細は不明である。また、明確な掘り込み、出土遺物、炭化物の検出は出来なかった。

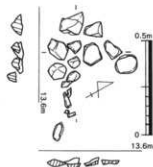


Fig.6 1SX025遺構実測図 (1/20)

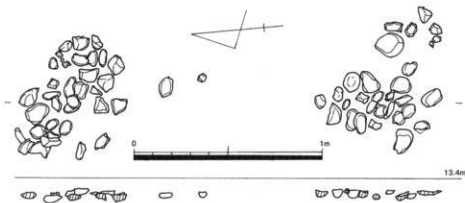


Fig.7 1SX030・1SX035遺構実測図 (1/20)

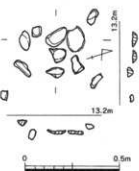


Fig.8 1SX040遺構実測図 (1/20)

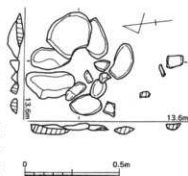


Fig.9 1SX045遺構実測図 (1/20)

その他の遺構について

調査区内における主な遺構は、集石遺構以外は検出出来なかった。しかし、調査区のはほぼ全面から、不定形や円形状の遺構を多く確認した。大部分は、黒褐色土の埋土であり、深さも10cm未満である。そのため、遺構としての可能性は低く、遺構面の凹部に堆積した痕跡、若しくは植物などによる根痕と考えられる。また、現代の攪乱やトレンチも含まれている。以下、本文の掲載に関係する遺構、出土遺物について説明をする。

1S D001 (Fig.5)

調査区南に位置する、一直線状に延びる現代の溝である。

所々に葡萄畑で使用した基礎石が認められる。出土遺物は、石器類（石錘・敲石・磨石）、黒曜石（スクレイパー、使用剥片、剥片）、サヌカイト（二次加工品）、縄文土器（楕円文・山形文）等がある。

1S D002 (Fig.5)

調査区南に位置する、トレンチである。出土遺物は、黒曜石（剥片）、縄文土器（楕円文）等がある。

1S X003 (Fig.5)

調査区南に位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、硅岩（剥片）、黒曜石（剥片）、サヌカイト（剥片）、縄文土器（楕円文）等がある。

1S X005 (Fig.5)

調査区西半分に位置する、包含層である。出土遺物は、黒曜石（剥片）、縄文土器（楕円文）等がある。

1S D010 (Fig.5)

調査区南に位置する、トレンチである。出土遺物は、黒曜石（石錘・スクレイパー）、サヌカイト（二次加工剥片）、縄文土器（楕円文・格子目文）等がある。

1S X012 (Fig.5)

調査区南に位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石（細石核・母核・剥片）がある。

1S D015 (Fig.5)

調査区中央よりに位置する、断面逆L字状を呈する現代の溝である。この溝内から、多量の河原石が出土した。現況が茶畑と葡萄畑であったため、暗渠として使用していたと思われる。出土遺物は、石器類（敲石・磨石）、黒曜石（石核・剥片）、縄文土器（楕円文・条痕文）等がある。

1S X017 (Fig.5)

調査区南に位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石（石錘）がある。

1S X019 (Fig.5)

調査区南西に位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石（剥片）、サヌカイト（剥片）、縄文土器（楕円文・山形文）等がある。

1S X029 (Fig.5)

調査区南に位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石（剥片）、縄文土器（楕円文）等がある。

1S X032 (Fig.5)

調査区南に位置する、土坑状の遺構である。出土遺物は、縄文土器（楕円文）等がある。

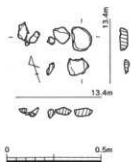


Fig.10 1SX050遺構実測図 (1/20)

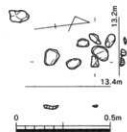


Fig.11 1SX055遺構実測図 (1/20)

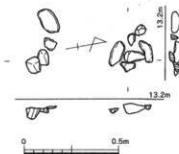


Fig.12 1SX060遺構実測図 (1/20)

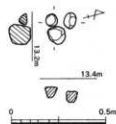


Fig.13 1SX065遺構実測図 (1/20)

1S X033 (Fig.5)

調査区南に位置する、土塚状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(剥片)、縄文土器(楕円文)等がある。

1S X042 (Fig.5)

調査区南に位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(剥片)、縄文土器(条痕文)等がある。

1S P047 (Fig.5)

調査区南西に位置する、Pit状の遺構である。出土遺物は、縄文土器(楕円文)等がある。

1S X051 (Fig.5)

調査区西に位置する、土塚状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(剥片)、縄文土器(楕円文)等がある。

1S X057 (Fig.5)

調査区中央よりに位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、サヌカイト(剥片)、縄文土器(楕円文)等がある。

1S X059 (Fig.5)

調査区中央よりに位置する、土塚状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(剥片)、縄文土器(山形文)等がある。

1S X061 (Fig.5)

調査区中央よりに位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(剥片)、縄文土器(山形文)等がある。

1S X073 (Fig.5)

調査区中央よりに位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(剥片)、サヌカイト(剥片)、縄文土器(楕円文・山形文)等がある。

1S X076 (Fig.5)

調査区中央よりに位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(剥片)等がある。

1S X077 (Fig.5)

調査区中央よりに位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、縄文土器(楕円文)等がある。

1S D079 (Fig.5)

調査区西に位置する、トレンチである。出土遺物は、黒曜石(石鏃・石核)、縄文土器(楕円文)等がある。

1S X081 (Fig.5)

調査区西に位置する、包含層である。出土遺物は、黒曜石(剥片)、縄文土器(楕円文)等がある。

1S P082 (Fig.5)

調査区中央に位置するPit状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(石鏃・剥片)、縄文土器(楕円文・山形文)等がある。

1S X083 (Fig.5)

調査区西に位置する、包含層である。出土遺物は、黒曜石(石核・スクレイパー・二次加工品)、縄文土器(楕円文・格子目文)等がある。

1S P084 (Fig.5)

調査区西に位置する、Pit状の遺構である。出土遺物は、縄文土器(楕円文)等がある。

1S X094 (Fig.5)

調査区中央に位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(石鏃)、縄文土器(楕円文)等がある。

1S X098 (Fig.5)

調査区中央に位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(剥片)、サヌカイト(スクレイパー)、珪岩(スクレイパー)、縄文土器(楕円文)等がある。

1S X099 (Fig.5)

調査区中央に位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(スクレイパー・剥片)、縄文土器(楕円文)等がある。

1S D111 (Fig.5)

調査区北に位置する、トレンチである。出土遺物は、黒曜石(石核・剥片)、縄文土器(楕円文)等がある。

1S X114 (Fig.5)

調査区北よりに位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、サヌカイト(使用剥片)等がある。

1S D121 (Fig.5)

調査区北に位置する、トレンチである。出土遺物は、頁岩(石包丁?)、縄文土器(楕円文)等がある。

1S X123 (Fig.5)

調査区北に位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(剥片)、石器(石錘)等がある。

1S X131 (Fig.5)

調査区北に位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(石鏃)、縄文土器(条痕文)等がある。

1S X132 (Fig.5)

調査区北に位置する、土壕状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(使用剥片)、縄文土器(楕円文)等がある。

1S X141 (Fig.5)

調査区中央に位置する、たまり状の遺構である。出土遺物は、黒曜石(使用剥片)、縄文土器(楕円文)等がある。



平成10年度 筑後東部地区関連遺跡全景 シート部分は鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査

(3) 出土遺物

溝

1 S D 001 (Fig.14・15, Pla.9・12・14)

石器

スクレイパー

(1) 黒曜石製のスクレイパーである。丁寧な両面加工が認められ、刃部も顕著に作り出している。現存長2.4cm、幅1.9cm、厚さ0.8cm、重さ2.5gを測る。

剥片

(2) サヌカイト製の剥片である。現存長4.6cm、幅2.3cm、厚さ1.0cm、重さ10.8gを測る。

使用剥片

(3) サヌカイト製の使用剥片である。一部、使用した部分が認められる。現存長6.7cm、幅1.9～2.5cm、厚さ0.8cm、重さ12.4gを測る。

石錘

(4.5) いずれも安山岩製の石錘である。4.5は扁平な礫を加工して左右の中央に抉りに施している。4は現存長7.8cm、幅6.0cm、厚さ3.6cm、重さ350gを測る。5は現存長8.4cm、7.0cm、厚さ4.7cm、重さ500gを測る。

敲石

(6) 安山岩製の敲石である。風化が著しいが、上下両端部には敲打痕が認められる。現存長8.3cm、幅7.8cm、厚さ5.3cm、重さ500gを測る。

磨石

(7) 安山岩製の磨石である。風化が著しいが、確実に一面使用されている。現存長12.3cm、幅8.5cm、厚さ5.6cm、重さ900gを測る。

石器

(8) 珩岩製の石材である。調整は不明であるが、一部、古い痕跡が認められるため、参考資料として提示した。現存長14.2cm、幅12.3cm、厚さ3.0cm、重さ500gを測る。礫石器？

縄文土器

(9.10) 9は胴部の破片である。外面に楕円押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.8～1.0cm程度である。色調は内外面とも明茶色で、器壁は1.0cmを測る。焼成は良好である。10は胴部の破片である。外面に小さく鋭い山形押型文が横走施文し、胎土は金雲母、砂粒を微量含む。色調は外面が明茶色、内面が暗黒色で、器壁は0.6cmを測る。焼成は良好である。

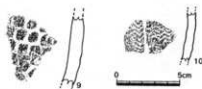


Fig.14 1SD001出土遺物実測図 (1/3)

1 S D 002 (Fig.18, Pla.9)

縄文土器

(1.2) 1は胴部の破片である。外面に山形押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を微量含む。色調は内外面とも淡橙色で、器壁は1.0cmを測る。焼成は良好である。2は胴部破片である。外面に楕円押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を多量に含む。楕円の施文は0.5cm程度である。色調は外面が橙茶色、内面が暗灰色で、器壁は1.0cmを測る。焼成は良好である。

1 S X 003 (Fig.16, Pla.14)

石器

剥片

(1) 珩岩製の剥片である。現存長2.9cm、幅3.2cm、厚さ0.5cm、重さ4.6gを測る。

1 S X 005 (Fig.18, Pla.9)

縄文土器

(1.2.3.4) 1は口縁部の破片で口縁端部は平坦気味である。外面に粗雑な楕円押型文が一部残り、内面に

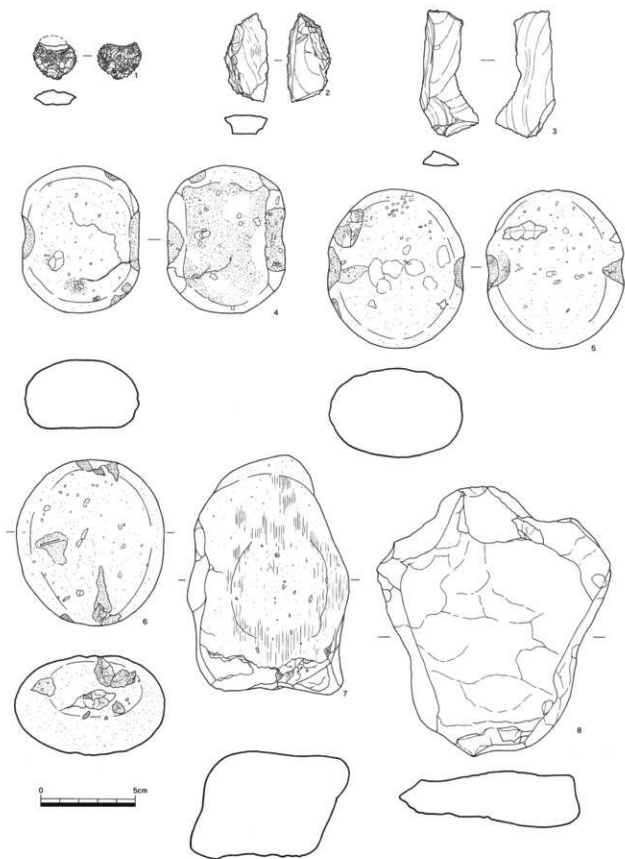


Fig.15 1SD001出土石器实测图 (1/2)

条痕押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を微量含む。色調は内外面とも、明茶色で、器壁0.6cmを測る。焼成は良好である。2は胴部の破片である。外面は楕円押型文が斜走施文し、内面はケズリ調整で、胎土は角閃石、砂粒を微量含む。楕円の施文は0.6cm程度である。色調は内外面とも、暗黒色で、器壁0.9cmを測る。焼成は良好である。3は胴部の破片である。外面は細かい楕円押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を微量含む。楕円の施文は0.2cm程度で細かい。色調は内外面とも、淡橙茶色で、器壁1.0cmを測る。焼成は良好である。4は胴部の破片である。外面に粗雑な楕円押型文が横走施文し、内面はナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.5cm程度である。色調は外面が濃橙色、内面は淡灰色で、器壁1.3cmを測る。焼成は良好である。

1 S D 010 (Fig.18, Pla.9・15)

石器

スクレイパー

(1) 黒曜石製のスクレイパーである。一部、自然面を残し、片側に刃部を作り出している。現存長3.9cm、幅2.1cm、厚さ0.7cm、重さ4.6gを測る。

石鏃

(2) 黒曜石製の石鏃である。二等辺三角形形状を呈し、挟りも深く丁寧な加工が施されている。現存長2.0cm、厚さ0.3cm、重さ0.3gを測る。腰岳産。

二次加工剥片

(3) サマカイト製の二次加工剥片である。現存長4.0cm、幅1.7cm、厚さ0.9cm、重さ4.9gを測る。

縄文土器

(4.5.6) 4は口縁部の破片で口縁部は丸くおさまる。外面は格子目押型文、内面はナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は内外面とも、明橙茶色で、器壁は1.5cmを測る。焼成は良好である。5は口縁部の破片である。外面は細かい楕円押型文が横走施文し、口縁端部は原体を押圧し刻み目が入り、内面は細かい楕円押型文が横走施文とナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.2~0.4cm程度である。色調は内外面とも、暗茶色で、器壁は0.8cmを測る。焼成は良好である。6は壺の屈曲部分と思われる胴部片で、外面は楕円押型文が斜走施文し、内面はナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は内外面とも、淡茶色で、器壁は1.2cmを測る。楕円の施文は0.5cm程度である。焼成は良好である。

1 S X 012 (Fig.16, Pla.15)

石器

細石核

(1) 黒曜石製の細石核（マイクロコア）である。分割された剥片を素材とし、片面に石核調整を行い、また、多方面からはブランク調整を行っている。打面については、正面と側面からブランク調整である。楔形の細石核であり、いわゆる西海技法の範疇に含まれるものであろう。現存長1.7cm、幅1.4cm、厚さ0.9cm、重さ2.5gを測る。

母核

(2) 黒曜石製の母核である。石核の素材を分割したときの剥片を素材としている。現存長2.7cm、幅2.0cm、厚さ1.2cm、重さ1.7gを測る。

剥片

(3) 黒曜石製の剥片である。現存長2.2cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm、重さ5.8gを測る。

1 S D 015 (Fig.17・18, Pla.9・13・15)

石器

石核

(1) 黒曜石製の石核である。三角形形状を呈しており、打面を移動させながら、連続した剥離が顕著に認められる。現存長4.4cm、幅3.1cm、厚さ1.2cm、重さ13.1gを測る。

敲石

(2.3) 2は安山岩製の敲石である。全体が風化しているが、顕著に敲打痕が認められる。現存長7.0cm、

幅6.5cm、厚さ4.0cm、重さ186gを測る。3は安山岩製の敲石である。全体が風化しているが、敲打痕が確認出来る。両側面には挟りのような痕跡も認められるため、石錘として使用された可能性も考えられる。現存長5.8cm、幅6.0cm、厚さ3.8cm、重さ250gを測る。

磨石

(4) 安山岩製の磨石である。全体に風化しているが、使用痕が認められる。現存長14.1cm、幅7.8cm、厚さ6.6cm、重さ1.1kgを測る。

縄文土器

(5.6.7) 5は胴部の破片である。外面に粗雑で細かい楕円押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.3~0.4cm程度である。色調は内外面とも、明茶色で、器壁は1.2cmを測る。焼成は良好である。6は胴部の破片である。外面にやや粗雑な楕円

押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.7~0.8cm程度である。色調は外面が橙色、内面は淡茶色で、器壁は1.4cmを測る。焼成は良好である。7は胴部の破片である。外面は条痕押型文が横走施文し、内面はケズリ調整で、胎土は角閃石、砂粒を多量に含む。色調は外面が暗灰色、内面は淡橙色で、器壁1.2cmを測る。焼成は良好である。



Fig.16 ISX003・ISD010・ISX012出土石器実測図(1/2)

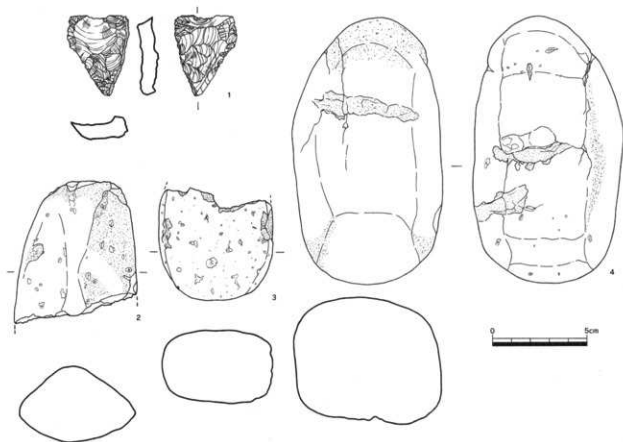


Fig.17 ISD015出土石器実測図(1/2)

1S X017 (Fig.19, Pla.15)

石器

石鏃 (1.2) 1は黒曜石製の石鏃で、脚部の破片である。調整は挟りが浅く両面加工が施されている。現存長1.4cm、幅0.5cm、厚さ0.2cm、重さ0.3gを測る。2は黒曜石製の石鏃で脚部の破片である。調整はやや粗く両面加工が施されており、製作途中で欠損したと考えられる、未製品の石鏃であろう。現存長1.9cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm、重さ0.4gを測る。

1S X019 (Fig.20, Pla.9)

縄文土器

(1.2.3) 1は胴部の破片である。外面に粗雑な細かい楕円押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.4cm程度である。色調は内外面とも淡橙色で、器壁は1.4cmを測る。焼成は良好である。2は胴部の破片である。外面にやや粗い山形押型文が横走施文し、胎土は砂粒を少量含む。色調は内外面とも淡橙色で、器壁は0.9cmを測る。3は底部の破片である。底部には棒状工具による放射状の条線が入る。胎土は角閃石、砂粒を多量含む。色調は内外面とも、淡茶色で、器壁は1.8cmを測る。焼成はやや良好である。

1S X020 (Fig.19, Pla.13)

石器

台石 (1) 安山岩製の台石である。全体に風化しているため、表裏面は凹凸部分も磨面も認められない。しかし、側面の一部に使用痕が確認出来る。また、敲石らしい痕跡も確認出来る。現存長26.3cm、幅31.3cm、厚さ6.6cm、重さ9.0kgを測る。

1S X029 (Fig.20, Pla.9)

縄文土器

(1.2) 1は胴部の破片である。外面に粗雑な楕円押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を多量含む。楕円の施文は1.0~1.2cm程度である。色調は外面が明茶色、内面は淡橙黄色で、器壁は1.0cmを測る。焼成は良好である。2は胴部の破片である。外面に楕円押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。

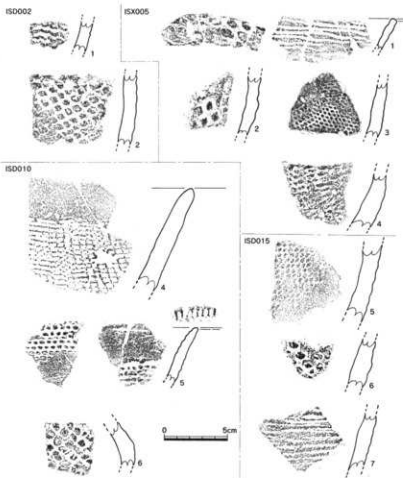


Fig.18 ISD002・ISX005・ISD010・ISD015出土遺物実測図 (1/3)

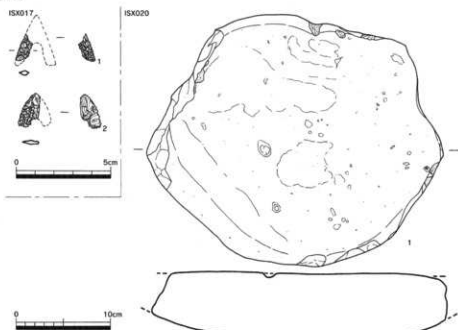


Fig.19 ISX017・ISX020出土石器実測図 (1/2・1/4)

楕円の施文は0.5~0.7cm程度である。色調は内外面とも、明黄色で、器壁は1.2cmを測る。焼成は良好である。

1 S X 032 (Fig.20, Pla.9)

縄文土器

(1) 胴部の破片である。外面に楕円押型文が斜走施文し、内面はナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.7~0.8cm程度である。色調は内外面とも、淡黄茶色で、器壁は1.1cmを測る。焼成は良好である。

1 S X 033 (Fig.20, Pla.9)

縄文土器

(1) 胴部の破片である。外面に楕円押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.5~0.6cm程度である。色調は内外面とも、暗橙色で、器壁は1.1cmを測る。焼成は良好である。

1 S X 042 (Fig.22, Pla.15)

石器

剥片

(1.2) 1は黒曜石製の剥片である。

現存長1.4cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ0.9gを測る。針尾島産？

2は珪岩製の剥片である。風化が著しいが旧石器？の可能性ある。現存長2.4cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重さ1.9gを測る。

1 S X 045 (Fig.20・22, Pla.10・15)

石器

剥片

(1) 黒曜石製の剥片である。現存長2.5cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重さ1.4gを測る。

縄文土器

(2.3.4) 2は口縁部の破片で口縁端部は平坦気味におさめる。外面は格子目押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を多量に含む。色調は内外面とも明茶色で、器壁は1.3cmを測る。焼成は良好である。3は口縁部の一部である。外面は粗雑な楕円押型文が斜走施文し、内面は原体条痕？胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.7cm程度である。色調は内外面とも暗橙色で、器壁は0.9cmを測る。焼成は良好である。4は胴部の破片である。外面は楕円押型文が斜走施文し、胎土は砂粒を少量含む。楕円の施文は0.4cm程度である。色調は外面が橙色、内面は暗黒色で、器壁0.9cmを測る。焼成は良好である。

1 S P 047 (Fig.20, Pla.10)

縄文土器

(1) 胴部の破片である。外面は楕円押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を微量含む。楕円の施文は0.3~0.6cm程度である。色調は内外面とも、明茶色で、器壁1.1cmを測る。焼成は良好である。

1 S X 051 (Fig.20, Pla.10)

縄文土器

(1) 胴部の破片である。外面はやや粗雑な楕円押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。

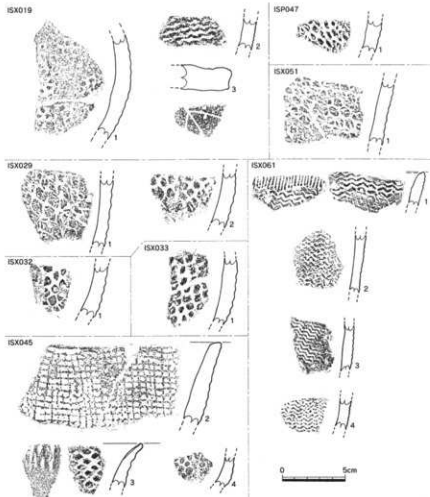


Fig.20 1SX019・1SX029・1SX032・1SX033・1SX045・1SP047
1SX051出土遺物実測図 (1/3)

楕円の施文は0.8cm程度である。色調は内外面とも、淡橙色で、器壁は1.0cmを測る。焼成は良好である。

1 S X 057 (Fig.22)

石器

剥片

(1) サスカイト製の剥片である。風化が著しいが、旧石器?の可能性がある。現存長1.9cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm、重さ2.6gを測る。

1 S X 059 (Fig.21, Pla.11)

縄文土器

(1) 口縁部～胴部の破片である。復原口径25.0cm、復原器高24.5cmを測る。外面はやや細かい山形押型文が横走施文し、内面は口縁部下から5cmまで山形押型文が横走施文されている。胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は外面が淡橙色、内面は暗黒色で、器壁は1.4～1.6cmを測る。焼成はやや良好である。早水台式の深鉢であろう。

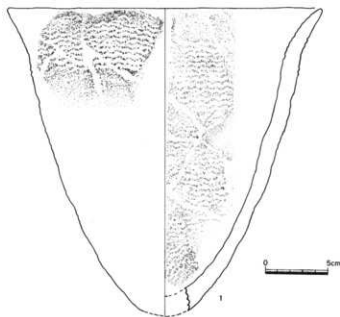


Fig.21 1SX059出土遺物実測図 (1/3)

1 S X 061 (Fig.20, Pla.10)

縄文土器

(1.2.3.4) 1は口縁部の破片で口縁部端部は丸くおさまる。外面は小さく鋭い山形押型文が横走施文し、内面は原体条痕が斜走施文し、小さく鋭い山形押型文が横走施文されている。胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は内外面とも、茶橙色で、器壁は0.7cmを測る。焼成は良好である。2は胴部の破片である。外面はやや粗い山形押型文が斜走施文し、内面はナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は内外面とも、茶橙色で、器壁は0.7cmを測る。焼成は良好である。3は胴部の破片である。外面はやや粗い山形押型文が斜走施文し、内面はナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は外面が茶橙色、内面は淡黄色で、器壁は0.7cmを測る。焼成は良好である。4は胴部の破片である。外面はやや粗い山形押型文が横走施文し、内面はナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は外面が茶橙色、内面は淡灰黄色で、器壁は0.8cmを測る。焼成は良好である。

1 S X 073 (Fig.23, Pla.10)

縄文土器

(1.2.3) 1は胴部の破片である。外面に細かい楕円押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.3cm程度である。色調は外面が橙色、内面は淡茶色で、器壁は1.0cmを測る。焼成はやや良好である。2は胴部の破片である。外面にやや粗雑な山形押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は内外面とも、淡黄色で、器壁は0.9cmを測る。焼成は良好である。3は胴部の破片である。外面に細かい山形押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は内外面とも、淡黄色で、器壁は0.9cmを測る。焼成は良好である。

1 S X 076 (Fig.22, Pla.16)

石器

剥片

(1) 黒曜石製の剥片である。現存長2.1cm、幅0.4cm、厚さ0.1cm、重さ0.1gを測る。

1 S X 077 (Fig.23, Pla.10)

縄文土器

(1) 口縁部の破片で口縁部は丸くおさまる。外面にやや大きめな楕円押型文が横走施文し、内面に原体条痕が縦位施文する。胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は1.0cm程度である。色調は内外面とも、明茶色で、器壁は0.7cmを測る。焼成は良好である。また、外面に黒斑が観察出来る。

1S D079 (Fig.22・23, Pla.10・16)

石器

石鎌 (1) 黒曜石製の石鎌である。三角形状を呈し、表裏に丁寧な加工が施されている。現存長1.8cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重さ0.7gを測る。

石核 (2) 黒曜石製の石核である。現存長3.4cm、幅2.0cm、厚さ1.4cm、重さ7.0gを測る。

縄文土器

(3.4.5) 3は口縁部の破片である。外面に楕円押型文が斜走施文し、内面は原体条痕が縦位施文する。胎土は角閃石、砂粒を多量含む。楕円の施文は0.6cm程度である。色調は外面は暗褐色、内面は黒褐色で、器壁は0.7cmを測る。

焼成はやや良好である。4は胴部の破片である。外面に楕円押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.6cm程度である。色調は内外面とも、淡黄色で、器壁は1.0cmを測る。焼成は良好である。5は胴部の破片である。外面にやや粗い楕円押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.5cm程度である。色調は内外面とも、淡黄茶色で、器壁は1.0cmを測る。焼成は良好である。

1S X081 (Fig.23, Pla.10)

縄文土器

(1) 胴部の破片である。外面は楕円押型文を斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.7cm程度である。色調は外面が暗茶黄色、内面が淡褐色で、器壁は1.0cmを測る。焼成は良好である。

1S P082 (Fig. 23・24, Pla. 10・16)

石器

剥片

(1) 黒曜石製の剥片である。現存長3.4cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ2.4gを測る。腰岳産。

石鎌

(2) 黒曜石製の石鎌である。表裏にやや丁寧な加工が認められる。また、周縁部を刃部として使用していたら、スクレイパーの可能性も考えられる。現存長2.0cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gを測る。

縄文土器

(3.4) 3は胴部の破片である。外面に細かい楕円押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.2cm程度である。色調は内外面とも、淡灰黄色で、器壁は0.9cmを測る。焼成は良好である。4は胴部の破片である。外面にやや粗雑な山形押型文が横走施文し、内面はナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を微量含む。色調は内外面とも、橙色で、器壁は0.8cmを測る。焼成は良好である。

1S X083 (Fig.23・24, Pla.11・16)

石器

スクレイパー

(1) 黒曜石製のスクレイパーである。周縁部に刃部を施している。現存長2.6cm、幅2.7cm、厚さ0.8cm、重さ3.8gを測る。腰岳産。

二次加工品石器

(2) 黒曜石製の二次加工品である。現存長2.1cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm、重さ2.8gを測る。

石核

(3) 黒曜石製の石核である。現存長3.5cm、幅1.3～2.0cm、厚さ1.3cm、重さ7.7gを測る。腰岳産。

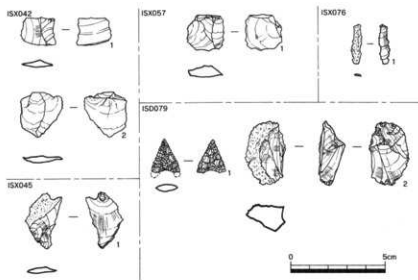


Fig.22 ISX042・ISX045・ISX057・ISX076・ISD079
出土石器実測図 (1/2)

縄文土器

(4~9) 4は口縁部の破片で口縁端部は丸くおさまる。外面は粗雑な細かい楕円押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.2cm程度である。色調は内外面とも、淡橙灰色で、器壁は0.6cmを測る。焼成は良好である。5は胴部の破片である。外面は粗雑な楕円押型文が斜走施文し、内面はナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.7cm程度である。色調は内外面とも、淡黄色で、器壁は1.1cmを測る。焼成は良好である。6は胴部の破片である。外面はやや粗雑な楕円押型文が横走施文し、内面はナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.5cmを測る。色調は内外面とも、淡黄色で、器壁は1.1cmを測る。焼成は良好である。7は胴部の破片である。外面は楕円押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.6cm程度である。色調は内外面とも、淡橙色で、器壁は1.1cmを測る。焼成は良好である。8は胴部の破片である。外面は格子目押型文で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は外面が橙色、内面は暗黒色で、器壁は0.8cmを測る。焼成は良好である。9は胴部の破片である。外面は格子目押型文、内面はナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は内外面とも、淡橙色で、器壁1.3cmを測る。焼成は良好である。

1 S P 084 (Fig.23, Pla.10)

縄文土器

(1,2) 1は口縁部に近い破片である。外面にやや粗雑な楕円押型文が横走施文し、内面は原体痕が確認出来る。楕円の施文は0.8cm程度である。色調は内外面とも、淡灰色で、器壁は1.0cmを測る。胎土は角閃石、砂粒を少量含む。焼成は良好である。2は胴部の破片である。外面はやや粗雑な楕円押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.7cm程度である。色調は内外面とも、淡茶色で、器壁は1.2cmを測る。焼成はやや良好である。

1 S X 094 (Fig.24)

石器

石鏃

(1) 黒曜石製の石鏃である。両脚部が欠損しているが、挟りが浅いタイプの三角形を呈すると思われる。表裏の調整は、比較的丁寧な加工が施されている。現存長2.0cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.2gを測る。

1 S X 098 (Fig.24, Pla.16・17)

石器

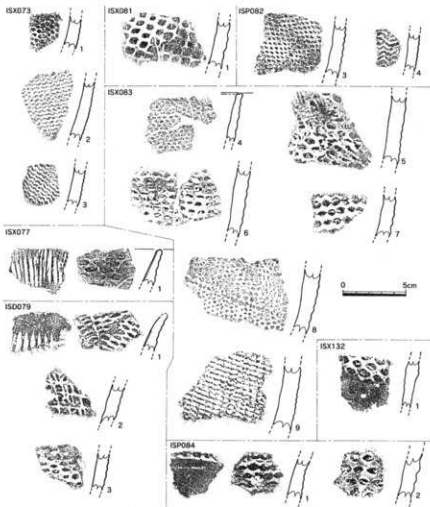


Fig.23 ISX073・ISX077・ISD079・ISX081・ISPO82・ISX083
ISP084・ISX132出土遺物実測図 (1/3)

スクレイパー
 (1,2)はサスカイト製のスクレイパーである。周縁部のほぼ全体に刃部加工が施されている。現存長7.7cm、幅4.8cm、厚さ1.5cm、重さ44.2gを測る。2は珪岩製のスクレイパーである。周縁部に刃部加工が施されている。現存長7.8cm、幅4.3cm、厚さ1.5cm、重さ45.3gを測る。

1 S X 099

(Fig.24, Pla.17)

石器

スクレイパー

(1) 黒曜石製のスクレイパーである。周縁部のほぼ全体に刃部加工が施されている。現存長3.6cm、幅3.6cm、厚さ0.8cm、重さ12.2gを測る。針尾島産。

1 S D 111 (Fig.25, Pla.17)

石器

石核

(1) 黒曜石製の石核である。現存長4.7cm、幅2.4cm、厚さ1.4cm、重さ14.7gを測る。

1 S X 114 (Fig.25, Pla.17)

石器

使用剥片

(1) サスカイト製の使用剥片である。片面からの剥離が行われている。現存長4.5cm、幅3.5cm、厚さ1.1cm、重さ10.5gを測る。

1 S D 121 (Fig.25, Pla.17)

石器

石包丁?

(1) 頁岩製の石包丁? 現存長3.6cm、幅5.3cm、厚さ0.3cm、重さ7.2gを測る。厚さがかなり薄いため、石板の可能性も考えられる。

1 S X 123 (Fig.25, Pla.14・17)

石器

石錘

(1) 安山岩製の石錘である。扁平な礫を加工し、左右の中央に抉りを入れている。現存長8.5cm、幅6.9cm、厚さ4.2cm、重さ500gを測る。

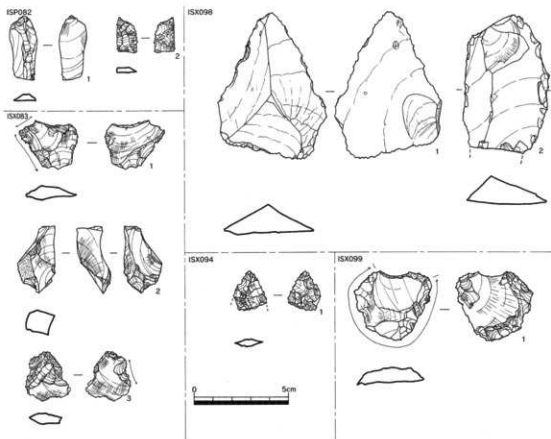


Fig.24 ISPO82・ISX083・ISX094・ISX098・ISX099出土石器実測図(1/2)

剥片

(2) 黒曜石製の剥片である。現存長3.2cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm、重さ3.8gを測る。

1S X 131

(Fig. 25, Pla.17)

石器

石鏃

(1) 黒曜石製の石鏃で、二等辺三角形形状を呈すると思われる。調整は、比較的丁寧に施されている。現存長1.9cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ0.7gを測る。

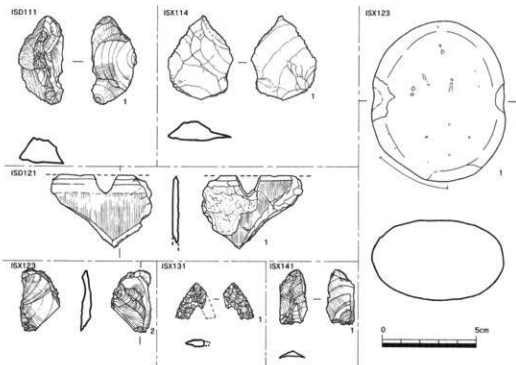


Fig.25 1SD111・ISX114・1SD121・ISX123・ISX131・ISX141出土石器実測図 (1/2)

1S X 132 (Fig.23, Pla.11)

縄文土器

(1) 口縁部に近い破片である。内外面はやや粗雑な楕円押型文が斜走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.8cm程度である。色調は外面が淡橙色、内面が淡灰色で、器壁は0.7~1.0cmを測る。焼成はやや良好である。

1S X 141 (Fig.25)

石器

使用剥片

(1) 黒曜石製の使用剥片である。現存長2.9cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gを測る。

包含層遺物 (Fig.26・27, Pla.11・14・18)

石器

石鏃

(1) 黒曜石製の石鏃である。両面にやや荒い加工が認められる。現存長2.3cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm、重さ1.1gを測る。C3~6グリット出土である。

使用剥片

(2) 黒曜石製の使用剥片である。現存長4.1cm、幅2.4cm、厚さ1.9cm、重さ4.2gを測る。D3~6グリット出土である。

不明石器

(3) 安山岩製の石材である。風化が著しいため調整は観察出来ないが、中央部付近に穿孔らしい痕跡が認められるため、参考資料として提示した。用途は不明である。現存長5.8cm、幅3.1cm、厚さ2.5cm、重さ68.6gを測る。C3~6グリット出土である。

縄文土器

(4~14) 4は口縁部の破片で口縁端部は楕円原体痕が施されている。外面はやや粗雑な楕円押型文が斜走施文し、内面は口縁部下4cm程まで楕円押型文が斜走施文する。胎土は角閃石、砂粒を少量含む、楕円の施文は0.5~1.0cm程度である。色調は内外面とも、明橙灰色で、器壁は1.0cmを測る。焼成は良好である。また、内面は黒斑が確認出来る。B0~4グリット出土である。

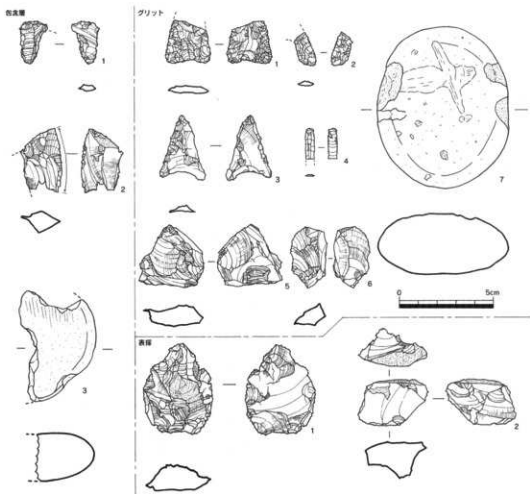


Fig.26 包含層・グリット・表採石器実測図 (1/2)

5は口縁部に近い破片である。外面は楕円押型文が斜走施文し、内面は原体条痕が残る。胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.7cm程度である。色調は外面が暗黒色、内面が暗褐色で、器壁は1.0cmを測る。焼成は良好である。E 2～4 グリット出土である。6は口縁部の破片で口縁部はやや丸くおさまる。外面は細く鋭い山形押型文が横走施文し、内面にも口縁部から山形押型文が横走施文し、後はナデ調整である。胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は外面が淡褐色、内面は淡灰色で、器壁は1.0cmを測る。焼成は良好である。E 2～4 グリット出土である。7は口縁部の破片で口縁端部は丸くおさまる。外面はやや粗雑な楕円押型文が斜走施文し、内面は口縁部から楕円押型文が横走施文する。胎土は角閃石、砂粒を少量含む、楕円の施文は0.6～0.7cm程度である。色調は内外面とも、暗黒褐色で、器壁は0.8cmを測る。焼成は良好である。C 2～4 グリット出土である。8は口縁部の破片で口縁端部は丸くおさまる。外面はやや粗雑な楕円押型文が斜走施文し、内面は原体条痕が縦位施文する。胎土は角閃石、砂粒を少量含む。楕円の施文は0.6cm程度である。色調は外面が暗茶色、内面が淡褐色で、器壁は1.0cmを測る。焼成は良好である。C 2～4 グリット出土である。9は口縁部の破片で口縁端部は丸くおさまる。外面は格子目押型文、内面はナデ調整で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は内外面とも、明褐色で、器壁は1.3cmを測る。焼成は良好である。C 2～4 グリット出土である。10は胴部の破片である。外面は細かい格子目押型文で、胎土は角閃石、砂粒を微量含む。色調は外面が橙色、内面が淡黄色で、器壁は0.8cmを測る。焼成は良好である。C 2～4 グリット出土である。11は胴部の破片である。外面は格子目押型文で、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は内外面とも、淡褐色で、器壁は1.2cmを測る。焼成は良好である。C 2～4 グリット出土である。12は口縁部の破片で口縁端部は丸くおさまる。外面は細く鋭い山形押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は内外面とも、暗黒灰色で、器壁は0.9cmを測る。焼成は良好である。C 2～4 グリット出土である。

13は胴部の破片である。外面は細かく鋭い山形押型文が横走施文し、胎土は角閃石、砂粒を少量含む。色調は内外面とも、淡茶色で、器壁は0.8cmを測る。焼成は良好である。C2~4グリット出土である。14は胴部の破片である。外面は不定方向の条痕押型文で、胎土は角閃石、砂粒を多量含む。色調は外面が淡橙色、内面は暗灰黒色で、器壁1.1cmを測る。焼成は良好である。C2~4グリット出土である。

グリット遺物 (Fig.26, Pla.14・17・18)

石器

石鏃

(1.2.3) 1は黒曜石製で先端部が欠損し、挟りが浅い三角形を呈する石鏃と思われる。調整は比較的丁寧な加工が施されている。現存長2.3cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm、重さ2.6gを測る。腰岳産。B0~4の出土である。2は黒曜石製の石鏃脚部であろう。調整は丁寧な加工が施されている。現存長1.9cm、幅0.8cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gを測る。腰岳産。E2~4の出土である。3は黒曜石製の石鏃で完形品である。二等辺三角形を呈し、調整は全体に粗く加工が施されている。現存長3.3cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ2.4gを測る。C2~4の出土である。

細石刃

(4) 黒曜石製の細石刃である。調整は両側縁部にやや粗い刃部が認められる。現存長1.1cm、幅0.5cm、厚さ0.1cm、重さ0.1gを測る。F3グリット出土である。

石核

(5) 黒曜石製の石核である。現存長3.3cm、幅2.2cm、厚さ1.2cm、重さ11.4gを測る。B0~4グリット出土である。

剥片

(6) 黒曜石製の剥片である。現存長3.2cm、幅1.7cm、厚さ1.2cm、重さ5.4gを測る。B0~4グリット出土である。

石錘

(7) 安山岩製の石錘である。扁平な碟を加工している。風化が著しいため調整がはっきりわからないが左右に浅い挟りが施されているようである。現存長8.6cm、幅6.9cm、厚さ3.2cm、重さ400gを測る。B0~4グリット出土である。

表採遺物 (Fig.26, Pla.18)

スクレイパー

(1) 黒曜石製のスクレイパーである。周縁部にやや荒い刃部を施している。現存長4.8cm、幅3.5cm、厚さ1.4cm、重さ21.7gを測る。

石核

(2) 黒曜石製の石核である。現存長3.7cm、幅3.3cm、厚さ1.9cm、重さ14.4gを測る。

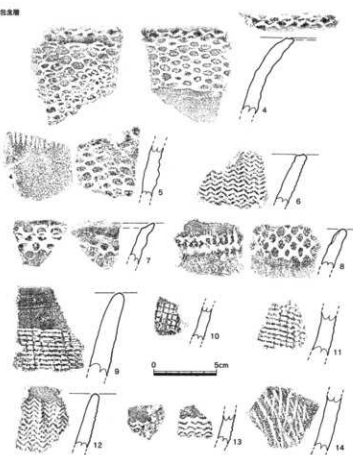


Fig.27 包含層出土遺物実測図 (1/3)

(4) 小結

今回の調査区内から集石遺構を10基確認したことは大きな成果である。また、遺物類に関しては、旧石器・石器（細石刃・細石核・石鏃・蔽石・磨石・石錘）や縄文土器（楕円文・山形文・格子目文）等が数多く認められたのも大きな成果である。次に、集石遺構について触れることにする。

集石遺構について

確認された集石遺構の保存状態が悪いため、不明な部分が多い。石材は河原石（安山岩）が大部分を占め、その多くが火を受けたため赤みを帯びていた。しかし、集石内からは焼土・炭化物は全く検出されていない。

集石の分布は、大きく3箇所に集中している。ISX025～ISX045がある調査区の南西側、ISX040・ISX060が分布する調査区の中央付近、ISX050・ISX055が分布する調査区の北西側付近である。その他、調査区内から焼石が認められている。また、近接調査区の鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査、鶴田牛ヶ池遺跡第3.4次調査では集石遺構は認められないが、第5次調査から集石遺構を1基確認している。今回の調査区の北にあたり、北限を示すと考える。

この遺構は石組炉（屋外炉・集石炉）とも考えられるが、保存状態が悪く、石を明確に配置（組んでいる）しているかどうかはわからなかった。それと、何度も精査したにもかかわらず、掘り込みが確認されなかった。掘り込みがないタイプであろうか？

しかし、検出した遺構の中でISX045は大きめの石を外側に配置し、円形状を呈すると思われるため、石組炉と考えても良い資料と言えよう。

また、石材に関しては、鶴田牛ヶ池遺跡第2次調査や第4次調査区の西側には自然流路（氾濫）と思われる痕跡が確認されている。おそらく、この流路からの石材を使用したと思われる。立地的に見ると、流路を挟んだ両側は微高地状となっていたと思われ、生活しやすい環境が整っていたと思われる。

旧石器について

市内出土の旧石器は現在10点確認されている。主に、角錐状石器・ナイフ形石器・細石刃・細石核などである。いずれも、後世の遺構に混じって出土しているため、現状では層の確定は至っていない。全て後期旧石器の時期に属す遺物である。鶴田地区では、鶴田牛ヶ池遺跡第4次調査から3点、鶴田東大坪遺跡第1次調査から1点、今回報告する鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査から2点と計6点を占めている。今後、この周辺の調査があれば、遺物（旧石器）の出土の確率は高いであろう。

【参考文献】

- | | | |
|-----------|------|-------------------------------|
| 筑後市教育委員会 | 2000 | 「筑後東部地区遺跡群Ⅲ」『筑後市文化財調査報告書第25集』 |
| | 2000 | 「筑後東部地区遺跡群Ⅳ」『筑後市文化財調査報告書第30集』 |
| | 2001 | 「筑後東部地区遺跡群Ⅴ」『筑後市文化財調査報告書第36集』 |
| | 2001 | ちくご遺跡だより42号 |
| 筑後市編さん委員会 | 1997 | 『筑後市史第1巻』 |

筑後東部地区遺跡群における鶴田牛ヶ池遺跡と周辺遺跡について

平成10年度に行われた県営調査整備筑後東部地区遺跡群の調査が終了し、鶴田地区の遺跡群の様子が解りつつある。以下、時代ごとの概観を試みたい。

旧石器時代

現在まで市内において、明確な遺構は確認されていない。遺物は、鶴田東大坪遺跡1次調査からナイフ形石器が1点出土している。今回報告する鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査からは、細石刃や細石核が確認されている。また、すぐ北に位置する鶴田牛ヶ池遺跡第4次調査からもナイフ形石器等を数点確認しており、筑後市内での旧石器時代の追加資料となった。

縄文時代

鶴田地区においては、平成5年に発掘調査された鶴田丸田遺跡から押型文土器が出土したため、当遺跡周辺での遺構、遺物の増加が期待できた。その後、平成8年度調査した鶴田野田遺跡、平成10年度調査した鶴田東牛ヶ池遺跡第1.2次調査、鶴田牛ヶ池遺跡第3.4次調査から押型文土器（楕円文）を中心に出土している。

立地は、標高約11～15m程の低位段丘上に遺跡群が分布している。

弥生時代

平成5年度調査の鶴田岸添遺跡第1次調査から弥生後期の竪穴住居が1軒検出されている。同じく第2次調査から弥生終末頃の竪穴住居7軒、第4次調査からは弥生後期の竪穴住居3軒が検出されている。平成10年度調査の鶴田西牛ヶ池遺跡から竪穴住居13軒、掘立柱建物9棟が確認されている。竪穴住居は弥生後期～終末頃に位置付けられる。いずれも集落の調査である。墳墓の調査例として、平成10年度調査の鶴田牛ヶ池第4次調査から墓棺1基を確認している。弥生時代中期前半頃に位置付けられる。

古墳時代

平成8年度調査の鶴田西畑遺跡から竪穴住居が2軒が検出されている。この竪穴住居は、大型住居に属し、中でも人の形を模倣したと思われる土製人形や蛇紋岩製の勾玉、鉄製方形鋤先、ミニチュア類等が出土しており、祭祀的行為が行われた竪穴住居と考えられている。平成10年度調査の鶴田東牛ヶ池遺跡第4次調査から竪穴住居を1軒、鶴田牛ヶ池遺跡4次調査からも竪穴住居が1軒が検出されている。いずれも最終埋没は、5世紀前半頃であろう。分布上とまよりはなく、単独で存在している状況である。

歴史時代

平成10年度に、古代官道「西海道」の路線の確認調査を目的として行われた、鶴田木屋ノ角遺跡からは、溝の側溝が確認されている。検出した遺構・遺物を含め、今後の調査が期待されることである。

中世

平成5年度調査の鶴田植原遺跡第1次調査から区画溝が検出されている。この遺跡周辺には、「屋敷」が存在したかのような字名が残っており、関連が注目出来る。平成8年度調査の鶴田東大坪遺跡第1次調査から13世紀前半頃の墳墓を確認している。

近世

平成9年度調査の鶴田東大坪遺跡第2次調査、鶴田溝代遺跡から溝を確認している。平成10年度調査の鶴田西牛ヶ池遺跡の土壌から18世紀後半を主体とする遺物を検出している。

その他（遺構・遺物）

平成6年度調査の鶴田岸添遺跡第2次調査から18基の落とし穴状遺構が検出しているが、時期の特定に至っていない。

平成10年度調査の鶴田木屋ノ角遺跡からの墨書土器の出土も注目すべき資料であろう。

- 【参考文献】 筑後市教育委員会
- | | |
|------|-------------------------------|
| 1994 | 「筑後東部地区遺跡群Ⅰ」『筑後市文化財調査報告書第11集』 |
| 1995 | 「筑後東部地区遺跡群Ⅱ」『筑後市文化財調査報告書第12集』 |
| 2000 | 「筑後東部地区遺跡群Ⅲ」『筑後市文化財調査報告書第25集』 |
| 2000 | 「筑後東部地区遺跡群Ⅳ」『筑後市文化財調査報告書第30集』 |
| 2001 | 「筑後東部地区遺跡群Ⅴ」『筑後市文化財調査報告書第35集』 |
| 2001 | 「筑後東部地区遺跡群Ⅵ」『筑後市文化財調査報告書第36集』 |



鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査参加者

補足資料

(1) はじめに

平成12年度刊行した『筑後東部地区遺跡群Ⅲ』の中で、鶴田野田遺跡の遺物が粉出したことについて触れた。しかし、他の遺跡の遺物整理作業中に見つかったため、改めて報告する。

遺構の詳細については、『筑後東部地区遺跡群Ⅲ』を参照されたい。以下、遺物の概要について報告する。

(2) 出土遺物について

1S D01・・・土師器（小皿・すり鉢・不明土製品）

1S P02・・・縄文土器（楕円押型文）

1S P03・・・縄文土器（楕円押型文）

1S P04・・・縄文土器（楕円押型文）

1S D05・・・土師器（甕）

1S P06・・・縄文土器（楕円押型文）

(3) 小結

遺物は、磨滅や小片のため図示出来なかった。平成10年度に調査した鶴田牛ヶ池遺跡や周辺遺跡からも縄文土器（楕円押型文等）が出土している。今回、報告する鶴田野田遺跡からも縄文土器（楕円押型文）が出土していたため、筑後東部地区遺跡群における縄文時代の展開を知る上での基礎資料となったのは大きな成果である。今後、資料の増加を期待しつつ遺物・遺構から更なる検討が必要であろう。

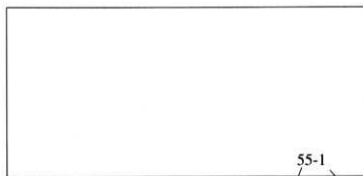


鶴田野田遺跡全景（南東から）

PLATE

凡例

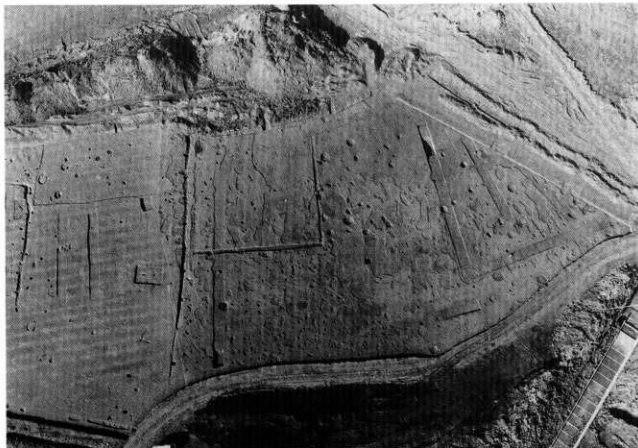
遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



55-1

Fig. 番号

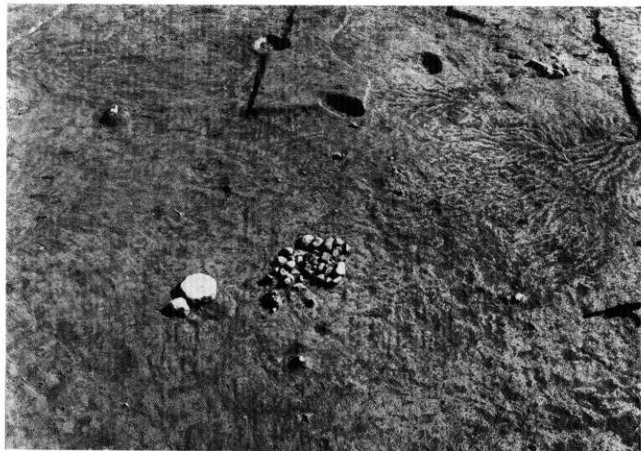
遺物番号



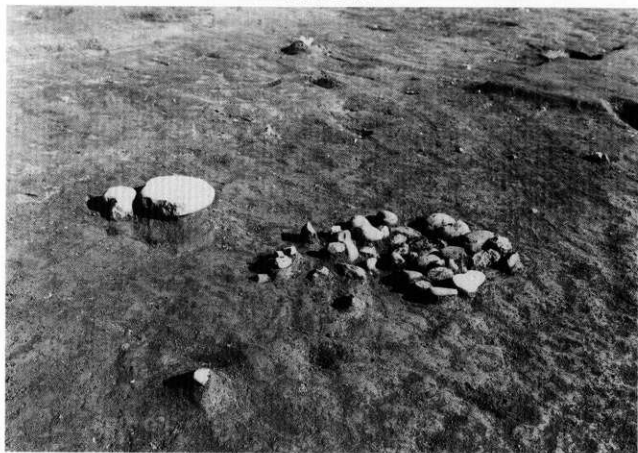
鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査全景（空中写真・真上から） 左は鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査



鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査・集石遺構分布状況（空中写真・真上から）



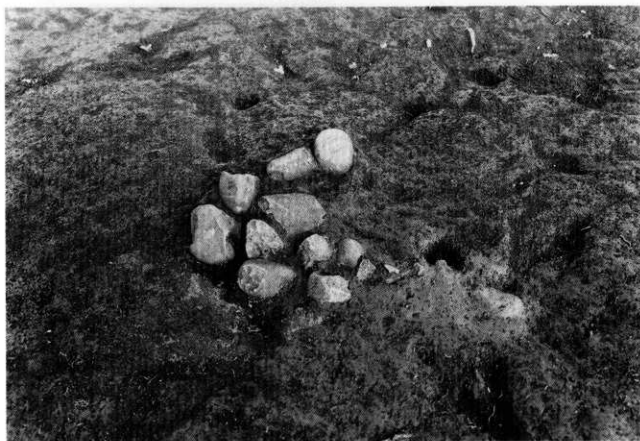
ISX020検出状況（西から）



ISX020検出状況（南西から）



ISX025検出状況（西から）



ISX025検出状況（南から）



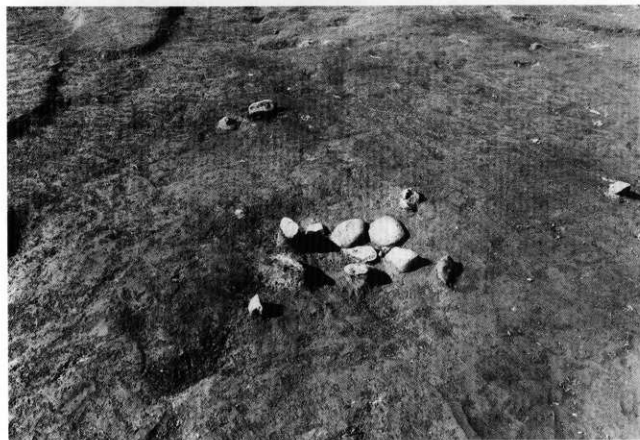
ISX030検出状況（北から）



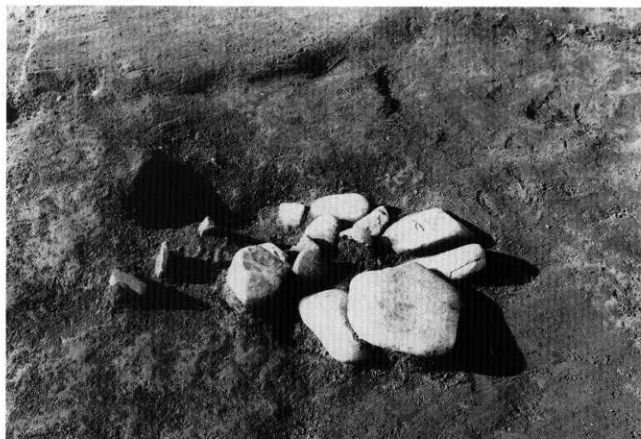
ISX030・ISX035検出状況（西から）



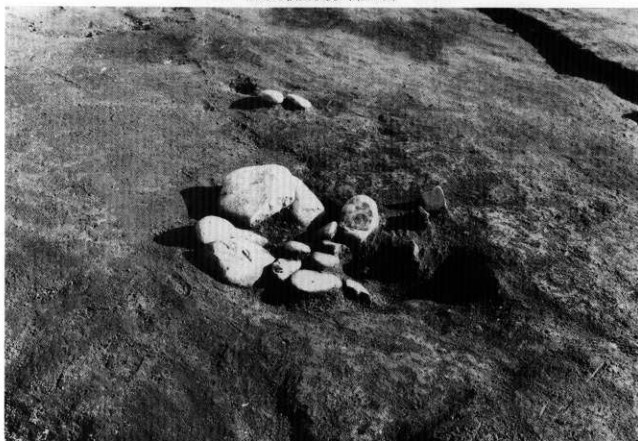
1SX030・1SX035・1SX045検出状況（南から）



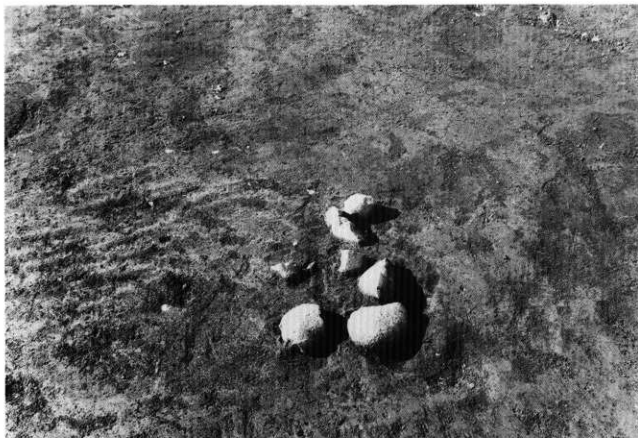
1SX040検出状況（東から）



ISX045検出状況（東から）



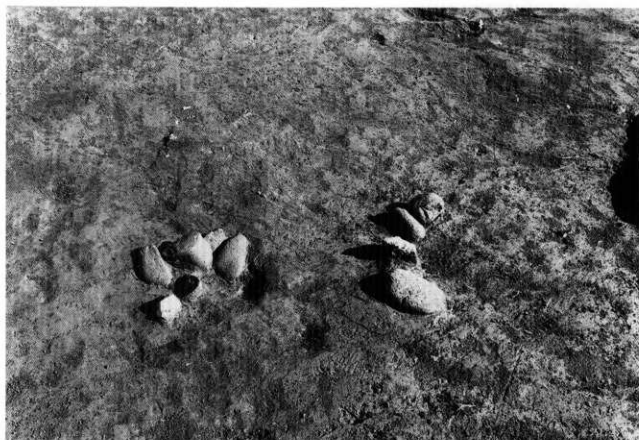
ISX045検出状況（西から）



ISX050検出状況（東から）



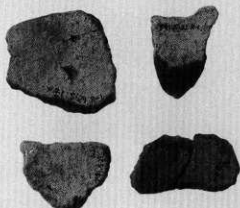
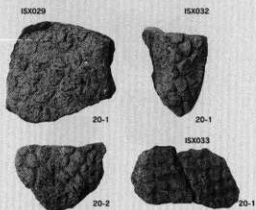
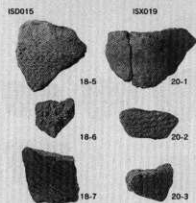
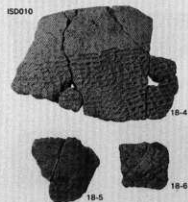
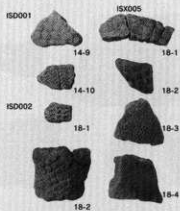
ISX055検出状況（西から）



ISX060検出状況（東から）



ISX065検出状況（東から）



ISX045



20-2

ISPO47



20-1



20-3



20-4



20-1



ISX061



20-1



20-3



20-2



20-4



ISX073



23-1

ISD079



23-3



23-2



23-1



23-4



23-3



23-5



ISX081



23-1



23-1



23-3



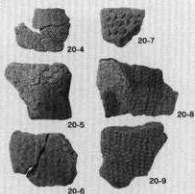
23-2



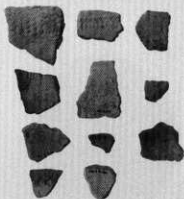
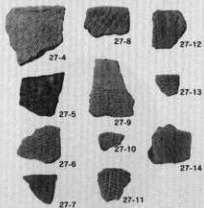
23-4



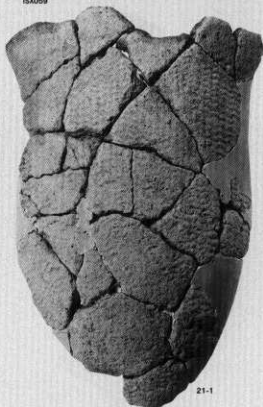
ISX063



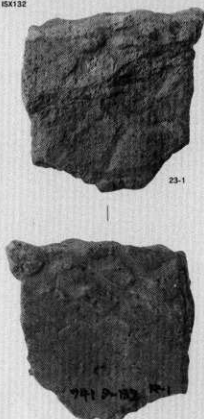
ISX068



ISX059



ISX132



ISD001



15-4

ISD001



15-5

ISD001



15-6



ISD001



15-7



ISD001



15-8



ISD015



17-2



ISD015



17-3



ISD015



17-4



ISX020



19-1



ISX123



25-1

グリット



26-7

ISX123



26-3



ISD001



15-1



ISD001



15-2



ISD001



15-3



ISX003



16-1



ISD010



16-1



ISX012



16-3



ISD010



16-2



ISD015



17-1



ISD010



16-3



ISX017



19-1

ISX017



19-2

ISX012



16-1



ISX042



22-1

ISX042



22-2

ISX012



16-2



ISX045



22-1

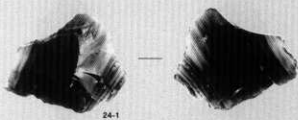


ISX076



22-1

ISX083



24-1

ISD079



22-1

ISX063



24-3

ISD079



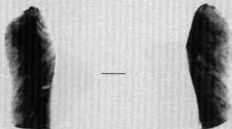
22-2

ISX098



24-1

ISPO82



24-1

ISPO82



24-2

ISX141



25-1



ISX098



24-2



ISD111



25-1



ISX114



25-1



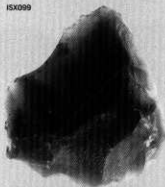
ISD121



25-1



ISX099



24-1



ISX123



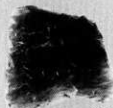
25-2

ISX131



25-1

グリット



26-1



グリット



26-2

グリット



26-3

裏面



26-1

グリット



26-4

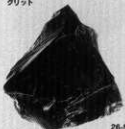
グリット



26-6



グリット



26-5



裏面



26-2



背面



26-1



背面



26-2



筑後東部地区遺跡群Ⅶ

筑後市文化財調査報告書

第38集

平成14年3月31日

発行 筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷 (資) 四ヶ所印刷
福岡県甘木市大字馬田336